



副院長
郭培五 Shogo Kakyu

2001年、東京慈恵会医科大学卒業後、厚木市立病院、独立行政法人國立病院機構横浜医療センターに勤務。藤澤和彦部長のもと脳血管障害・頭蓋底外科治療に従事する。東京慈恵会医科大学脳神経外科学講座助教。東京慈恵会医科大学脳神経外科学講座診療医長を経て、2018年に脳神経外科東横浜病院副院長に就任。東京慈恵会医科大学脳神経外科学講座非常勤講師。



医療法人社団のう教会
脳神経外科東横浜病院

〒221-0863 神奈川県横浜市神奈川区羽沢町888番地
TEL.045-383-1121
<https://houkyukai.or.jp/>
■ 診療時間：9:00 ~ 11:30/14:00 ~ 16:30
急患は24時間365日診療可能
■ 休診：水曜・日曜・祝日
■ 診療科目：脳神経内科



学童保育の取り組みは、共働きやシングルマザーの職員からも好評を博している。福利厚生とどうえ、昼食も無料で提供している

同院では、プライバシーに配慮する形で職員のメンタルヘルス相談窓口を第三者機関に依頼。雇用欲を持った職員を“守る”ことに注力している。

術が求められる。近年はカテーテルによる脳血管内治療の技術を前面に押し出す病院も少なくないが、郭副院長は一刻を争う救命の現場では、開頭による外科手術と、脳血管内治療の「二刀流」が求められると言ふ。

タニシイ
二刀流々で的確な治療を

に配慮する。近年はカーテルによる脳血管内治療の技術を前面に押し出す病院も少なくないが、郭副院長は一刻を争う救命の現場では、開頭による外科手術と、脳血管内治療の「二刀流」が求められると言ふ。

「この疾患の病態ならカーテルで低侵襲手術の方がいい、時間はかかるけど開頭術で確実に治すべき」と判断するような場面で、技

外来や入院患者が行き交う以外は静かな院内で、人知れず医師たちは急患を救うポジションに着く。運び込まれた患者は、MRIだけではなく、脳の血流をリアルタイムの3D画像で把握できる新型CTの活用によって明確な治療プランが迅速に示される。

「この2年間、私たち医療従事者は文字通り危機的状況にありました。民間でも、打撃を受けた業界から『ピンチをいかにチャンスに変えるか』ということを実践した企業が飛躍を遂げています。私たちもコロナ禍という未曾有の危機をどう『チャンス』に変えられるのかにチャレンジしています」

見られる環境を整備する、これにはじめました」

導人が決定した当日には大規模研修に使っていたスペースを学童保育用に確保、フローリング張りやだつた床に畳を搬入し、子どもたちが安全に過ごせる環境を整えた職員の唯一の息抜き、楽しみである食事にも配慮し、焼き肉やビザ時にはキッチンジャーを呼んでおいしい食事を提供した。

「例えば金一封を支給というやり方もありますが、お金は使えばいいから安心して働ける環境にお金を



医師や看護師だけでなく、医療事務職員も含めた総勢100人のモチベーションを保つために、食事には工夫を凝らす

いつもと変わらぬ院内。救急患者の受け入れが決まると担当の医師や技師、ナースなどのスタッフたちは慌てた様子もなく、速やかに持ち場につく。

「命にかかる場面では、何よりもスピードが重要です。適切な診断に基づいた的確な治療を1秒でも早く。そのため患者搬入の動線を考え抜き、ストロークチームの効率的な動き方もシミュレーションを重ねています」

24時間365日体制で救急搬送を受け入れる脳神経外科東横浜病院の郭樟吉副院長は、数々の臨床経験に裏打ちされた同院の「人の脳、命を救うためのシステム」の重要性をこう語る。

「例えば、救急搬送の受け入れが

〔「職員ファースト」が、質の高い医療を生み出す。〕

2018年より副院長に就任した郭医師は、超高齢化社会が到来しているわが国においては、「ドラステイックなイノベーションが必要」と語る。

「まずは全職員が安心して働ける環境を整えること。」職員ファースト。が病院機能の強化につながることとらえています」

医師としてだけでなく、経営の観点からも病院全体をとりまとめる郭副院長は、多くの病院が掲げる「患者ファースト」の実現のためにには職員が働きやすい、モチベ

A photograph showing a medical professional in a white coat and a surgical mask standing next to a large, white, curved medical machine, possibly a CT scanner or a similar imaging device. The machine has a circular opening and is situated in a clinical environment with blue walls.

考え尽くされた動線に基づき、スピーディな治療が可能になりました。2023年には新病院の完成を控え、さらなる改革が進むいくわけですから」

こうした施策は環境面にとどまらない。郭副院長が「病院が一番遅れている」という「健康経営」の側面では、病院が保険料を負担する形で全職員ががん保険に加入するなどの先進的な取り組みも行っている。

「地域の健康を守る医療従事者が、健康を損ねたときにはどうするか? がんに罹患して、まともな生活に

使う方がいい。その後にも残つて、いくわけですから」

こうした施策は環境面にとどまらない。郭副院長が「病院が一番遅れている」という「健康経営」の側面では、病院が保険料を負担する形で全職員ががん保険に加入するなどの先進的な取り組みも行っている。

「地域の健康を守る医療従事者が健康を損ねたときに行うするか?がんに罹患してしまったと治療に時間がかかることも考えられますし、完治したとしても戦場に戻つてくるのが難しい現状がある」

こうした問題を医療現場から変えていく。保険のおかげでがん治療に専念でき、当然戻つてくる場所もある。

「がんになつても病院が守る。あなたの心身の健康に配慮していくますよ」というメッセージにもなる。心理的な安全が確保されていることで病院機能が向上、結果として「患者ファースト」な対応ができる

医師や看護師だけでなく、医療事務職職員も含めた総勢100人のモチベーションを保つために、食事には工夫を凝らす

師の技術の成長のラーニングカードを早めていかなければいけないと思います。早くから二刀流が当たり前になり、外科手術と血管内治療の両方を選択肢として持つことができれば、確実に救える命は増えるんです」

同院では、最先端のVR技術を臨床教育に導入するなど、旧来の「見て覚える」「背中で見せる」経験主義の教育からの脱却にも着手している。

「自分に教えられることは全て教える。技術が流出することを恐れるのではなく、みんなで共有して積極的に活用していくのがこれから」の医療を発展させる道です」

こうした姿勢と共に鳴して、同院には志を持つ若い優秀な医師が集まつてしまっている。

「わたし自身、スーパーバイザーとしてハイブリッドな考え方のメリットを伝えながらも、自分が熟練するにしても君たちには負けないからね」というのもあります。原理原則を身に付けていれば技術が衰えることはありませんから」

救急車搬送台数22261台（2020年1月～12月）という、病床数60床規模の病院としては驚異的な数字を実現するのは、大学病院並みの治療機器と地域病院ならではの病院一丸となつた対応力。脳神経外科東横浜病院は「地域の脳卒中撲滅」という究極の目標に向かって大胆な改革を推し進め成長を続いている。